

『おくのほそ道』の魔境

松 隈 義 勇

『おくのほそ道』三百年の聲がしきりに聞かれる。その遺跡ゆゑに関する怖いお話しをしよう。

数年前、文芸科一年の研修旅行で福島県の黒塚に行った。安達太良山系の東に広がる安達が原に住んで、人をあやめた鬼女の骸を埋めたと伝えられる塚である。高い杉の植わる塚の前で撮った或るゼミの写真のネガの、学生の列の端に着物姿の老婆の姿がはっきり写っていた（焼いた写真には現れていない）。それを、私も見た。近くに怪しげな岩屋や気味悪い川があったりするこの辺りでは奇怪な現象が時折起こるといふようなことも聞いた。

安達が原と並んで魔の荒野と恐れられたのが栃木県的那須野が原である。インド・中国

から日本に渡ってきた金毛九尾の狐が玉藻の前という美女に化けて帝を悩ましたが、正体を見顕まわされてこの原に隠れ、ついに退治されたという伝説がある。那須黒羽の町はずれにそれを祀った玉藻稲荷神社がある。深い水を湛たえた小さい池を前にした祠は樹林の中に暗く、妖気がたちこめている。狐の怨霊が石と化して、生類を殺し続けたという、その殺生石は那須湯本に今もある。

黒塚も殺生石（玉藻の前）も能で名高く、それで芭蕉はその遺跡を尋ね歩いたのである。那須野が原のただ中で芭蕉等の前に、妖精のように姿を見せるのが少女かさねである。場所が場所だけに文学的効果は抜群である。

魔境めいた所では、雨に逢うことが多い。芭蕉は雨で探訪を果たさなかつたが、宮城県名取市のはずれの田園中にある、ここで客死したと伝えられる平安の歌人藤原実方の墓。

竹藪や林に囲まれて昼も暗く、折からのわか雨で木々がざわめき、同行の人は誰かすすり泣いていると、身をすくめ、声をふるわした。それから、平泉中尊寺の奥にある能楽堂のあたり。日の傾く頃、私は一人。降りしきる雨の中をよぎり過ぎる幻がふっと見えた。

北陸の難所、親不知は今でも怖い感じだった。ゼミ旅行の金沢で、芭蕉から死を惜しまれた一笑の墓で撮った写真に学生以外の人の顔が見えると、一人の学生が悲鳴を上げた。

霊場という所は半面に魔境という性格を秘めている。栃木県の日光は東照宮のできる以前からの霊場で、魔境めく所でもある。中でも芭蕉が探勝した含満が淵は、大谷川の溪谷美が見られる所だが、薄気味わるい所である。山側の日のささぬ路に沿って、人の体くらしいの坐った形の苔むした石仏がズラリと並んでいる。暗い樹陰に居並ぶ石仏は亡霊の群のように、冥界にでも入り込んだような気がしてくる。石仏は七十体もあるらしいが、かぞえるたびに数が違うので、お化け地蔵と呼ばれていると聞いた。

芭蕉の訪れた中の最高の霊場といえは出羽三山である。特に奥の院の湯殿山は神秘的な行場で、御神体は頂から温泉の湧く奇怪な赤い大岩である。即身仏といって地中に入り仏になったミイラが周辺に点在する。

私が特に鬼気を感じた霊場は、死者の霊の棲む山といわれる山形県の立石寺である。数回登ったうちの三度はお参りの人も殆どない、雨の降りこめる夕暮れ時であった。全山は樹木に覆われた岩山で、路傍の岩壁に供養の文字や墓碑名などが刻まれている。

千数百段という石段を踏んで奥の院に近づくとき、路の片側の岩壁の根もとに所狭しと立ててある、頭に滑車の付いた卒塔婆が異様な

雰囲気漂わしている。

奥の院の堂内に納められた、死者の骨壺や写真、人形、亡き年少者の結婚の様を想い描いた絵馬などが、薄暗い燈で幽かに見える。そういう土俗信仰、庶民信仰的な悲しいおどろおどろしさを、芭蕉ほどの感性の持ち主が見過すはずはあるまい。それを証明するのは現地で詠まれた初案の、「山寺や石にしみつ

く蟬の声」である。蟬の声が石にしみつくとはいかぬけしない感じ方だが、しかしどこか不気味な感じをひそませている。おそらく芭蕉の直観的に感じたままの表現なのであろう。ところが芭蕉はこれを推敲して、「閑さや岩

にしみ入る蟬の声」と改め、前文においてその境地の幽清閑寂であることを極力たたえた。清域で鳴く蟬の声を、岩に沁み徹ると把握した、その特異さによって確かな俳意を得、またこの上もない静かさを表し得ている。大自

芭蕉の心には陰（暗）と陽（光）といった相反した極があつて、その相克し合うところから独特の深さと力が生まれている。つまり、光は暗によって一層明るくされているように想われるのであるが、この句の場合、陰は殆ど消されてしまつていようでありながら、そうではなく、止揚され、底の方に沈み込まされていて、陽である幽清閑寂というものを、むしろ裏から支え、それを微妙に深める作用をしているのではあるまいか。

この句にうたわれている「閑さ」が、文字の顔面通りの幽清閑寂というだけでなく、寂靜、涅槃の死の世界に通じる、ぞつとずるような、底無しの深さをひそめているのは、その所為であるように、私には思われる。

そう思ってみると、平泉での、人間のはかなさを嘆じた「夏草や兵どもが夢の跡」の句には、草むらにちらばる白骨のイメージがある。また、越後路での旅の悲しみを詠んだ「荒海や佐渡によこたふ天河」の句では、荒れ狂う海の響きの中に死霊の声が聞こえ、佐渡が島には怨霊の姿が見える。天の川は死の世界との間をつなぐ橋とも思われる。

芭蕉のすぐれた句には死のイメージがひそんでいると感じるのは、私だけだろうか。